英国読書協会が実施する Reading Well for children の研究
―子どものウェルビーイング向上の観点から―

関　日菜子

近年、子どものウェルビーイングについて関心が高まっている。OECD が 2022 年 7 月に公開した OECD Child Well-being Dashboard では、自己有用感がある子どもの割合、人生に意義や目的を感じている子どもの割合、全体として人生に満足していると感じている子どもの割合の 3 つの項目において、日本が OECD 加盟国の平均を大きく下回る結果となった。このような状況に対し、2023 年の中央教育審議会がまとめた「次期教育振興基本計画について（答申）」では「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」が基本方針に掲げられている。子どものウェルビーイングへの関心の高まりの中で、イギリスでは、英国読書協会（The Reading Agency）によって、子どもたちが読書を通じて健康やウェルビーイングについて理解を深め、それらを管理できるようになることを意図した活動である Reading Well for children が立ち上げられた。本研究では、この先進的な Reading Well for children の活動を取り上げ、ウェルビーイング向上のための読書活動推進という観点から、作成されたブックリスト掲載の図書の特徴を分析する研究をおこなう。

研究方法については、（1）英国読書協会が提供している Reading Well for children について、同じく英国読書協会が実施している子ども向け読書推進プログラム Summer Reading Challenge との比較を通じてその特徴を明らかにするため、Reading Well for children のブックリストに掲載された図書と、Summer Reading Challenge の 2023 年公式ブックリストである Ready, Set, Read! に掲載されている図書との比較調査を行った。また、（2）子ども向けの Reading Well for children の特徴としてフィクションの活用が指摘できることから、それらの図書については実際に入手して調査分析を行った。

具体的には、Reading Well for children のブックリストに掲載された図書について、(1) 英国図書館（British Library）が作成する British National Bibliography の書誌情報を使った計量的な特徴の記述と Ready, Set, Read! に掲載されている図書との比較検討、(2）フィクションの図書（「Juvenile fiction」の件名が付与されたもの）の形態や内容に関する調査分析をおこなった。

本研究の結果から指摘される主要な点として、以下のようなことが挙げられる。イギリスでは、自閉症、ソーシャルワーク、芸術療法の専門的な出版社が児童書を出版していること、心理の専門家・病気や障害の当事者による児童書が出版されていること、こうした読書環境が、子どものウェルビーイングの向上のための読書推進活動を支えていること。また、Reading Well for children のブックリストに掲載されたフィクションは、子どもの主人公が困難を克服する物語となっていること、ダイバーシティーに配慮されたものであることが指摘される。これらを踏まえつつ、子ども向けの読書活動推進のあり方を考察する。

（指導教員　原 淳之）